

令和元年9月9日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04159

研究課題名（和文）児童福祉施設における子どもの包括的発達支援モデルの構築

研究課題名（英文）Construction of a comprehensive developmental support model for children in children's welfare facilities

研究代表者

坪井 裕子 (TSUBOI, Hiroko)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：40421268

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、児童福祉施設における子どもの包括的な発達支援モデルの構築である。子どもたちを対象に性や暴力の問題に対応するための心理教育プログラムを実施した。また、児童福祉施設における学習支援体制の実態把握の調査を実施した。子どもたちの心理教育アセスメントを活用し学習支援を行った。児童福祉施設の子どもの心理的な危機状態からの回復と、健全な発達の支援に焦点をあてた取り組みが必要だと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、児童養護施設入所児の性や暴力の問題に関する心理教育プログラムを開発し、実際の施設で実施したものである。職員の意識や取り組みを検討し、プログラムの改善を行って、現場に活かす取り組みを行った。さらに、子どもたちの学習と進路についての実態把握調査はこれまでなかったものであり、この調査をもとに、実際の子どもの対応を検討できるという点においても、子どもたちへの包括的な支援を考えるうえで、学術的にも意味があるといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to construct a comprehensive developmental support model for children in children's welfare facilities. We conducted a psychological education program to address the issues of sex and violence for children. In addition, we investigated the situation of the learning support system in the child welfare facilities. The Children's psychological education assessment was used to support learning. It is thought that it is necessary to recover from the psychological crisis state of children in child welfare facilities, and to focus on the support of healthy development.

研究分野：臨床心理学

キーワード：児童福祉施設 心理教育 発達支援 学習支援

1. 研究開始当初の背景

虐待等を受けた子どもの心理危機（心的被害）の問題について、これまで「トラウマ」（あるいは心的外傷後ストレス）や「愛着」の問題という概念で捉えられることが多かった。問題行動の背景には、人に対する不信感や、人生に対する無力感、抑うつ感などが示されている。特に虐待を受けた子どもたちや、何らかの事情で親と離れて暮らす子どもたちは、それだけで大切なもの（精神的にも）の喪失を体験している。児童福祉施設の子どものたちにとって、このような喪失体験からの回復につながる基本的な生きる力をはぐくむことが大切である。そして、生きていく力のもととなる自己肯定感の獲得が重要である。特に、性や暴力に絡むトラブルは施設で暮らす子どもたちの大きな問題となっている。さらに学習の遅れなどを抱えた子どもに、施設の生活職員だけで、取り組みを行うことは困難が伴う。そこで、臨床心理学的な視点から性や暴力の問題に取り組むとともに、学習支援についての心理教育的なプログラムを開発する。学習支援事例を蓄積していくことから得られる知見によって、子どもたちの学習支援に役立つプログラムの作成の推進にもつながると考える。プログラムの内容を生活の中に定着させるような取り組みを行っていくことに学術的かつ実践的な意義があるといえる。

2. 研究の目的

本研究は、社会的養護の環境にある子どもたちの心理的な危機状態からの回復と、健全な発達支援に焦点をあて、施設における対応や支援の工夫を検討するものである。主に以下の2点を中心に最終的には児童福祉施設における包括的な支援モデルの構築を目的としている。

(1) 心理教育的アプローチの開発

子どもの健全な「発達支援」に焦点をあて、自分の存在意義を確認し、生きていく力を育む心理教育的アプローチの開発を目的とする

(2) 子どもの学習支援

子どもたちの学力向上とそれに伴う自己肯定感の獲得に貢献する学習支援プログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 施設入所中の子どもたちに対して心理教育プログラムを実施し、また、心理教育プログラムに関わる職員のミーティングに参加し、職員の意識に関するデータも収集した。

(2) 全国の児童養護施設を対象に、施設における学習や進路指導に関する体制および実態に関する調査を実施。合計 92 施設からの回答を得た。

(3) 児童養護施設に入所している児童に対して、個別の心理教育アセスメントを実施し、その結果の分析結果をもとに、個別の学習支援プログラムを作成。

(4) 児童養護施設における学習支援の実態を把握するために、施設での学習体制に関する聞き取り調査及びボランティア経験者の半構造化面接。

(5) 児童養護施設に入所している児童を対象に、学校生活スキルに関する質問紙調査および、学校における対人葛藤場面における葛藤解決方略に関する半構造化面接を実施。

4. 研究成果

(1) 心理教育プログラムについて

プログラム対象児・実施頻度：

幼児～中学生を年齢別に分け、各グループに実施者 2 名がつき、月 1 回ずつ実施。

プログラム内容

命の仕組み（生命の誕生・産道体験など）や、自分を大切にすること（プライベートゾーン・第二次性徴など）、人との関係（いいタッチ悪いタッチ/ふわふわ言葉、とげとげ言葉など）、現実の身を守ること（不審者対応/防犯など）を組み入れた。

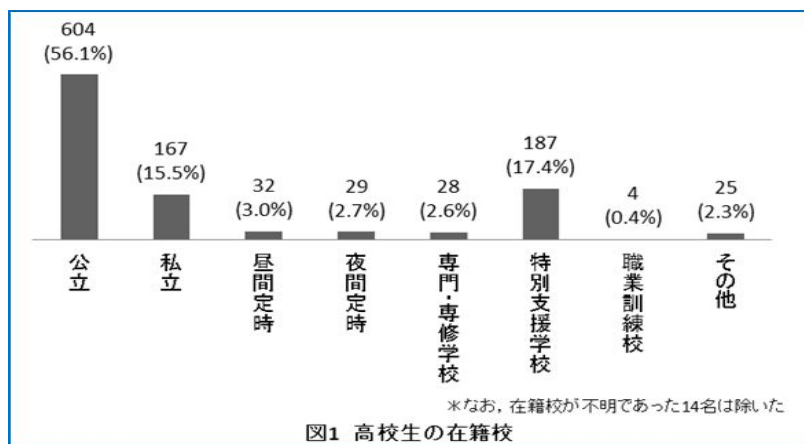
職員から見たプログラムの効果

プログラム参加後の子どもの様子の変化に関する 8 項目について各得点を比較したところ、指導員は子どもの攻撃性が強くなったと感じており ($t(21)=2.09, p<.05$)、一方、保育士は、子どもの性化行動が少なくなったと感じていた ($t(21)=2.22, p<.05$)。また、保育士は「子どもからの相談が増えた」「子どもが自分を大切にできるようになった」と感じていた（それぞれ ($t(21)=2.39, p<.05$; $t(21)=2.79, p<.05$)。これらのことから、プログラムの実施による子どもの変化を職員が感じていることが明らかになった。

(2) 学習・進路に関する調査

入所児の状況:平成 27 年 9 月時点で 92 施設に 4,683 人が入所していた。未就学児は 749 人、その内、特別支援学校(幼稚部)に 2 人在籍、それ以外は地域の幼稚園に通園していた。小学生 1,796 人、中学生 1,035 人、2 割以上(それぞれ 22.0%, 20.0%) が、通級、特別支援学級、特別支援学校、に在籍していた。高校生 1,090 人は、公立高校の在籍率が 56.1%と高く、次いで、特別支援学校が 17.4%であった(図 1)。その他には、通信制高校や高等専門学校等が含まれた。

また、高校生 161 人（高校生の内 14.8%）が、療育手帳を所持していることが明らかとなった。



過去3年間の進路状況及び中退・離職状況の内訳：中学卒業生 1,101 人の進路は、施設入所のまま高校等進学が 80.6%と大半を占めた。高校卒業生 794 人の進路は、正規就職 487 人、大学等進学 146 人、非正規就職 82 人、措置変更 24 人、と順に高かった。大学等進学者の 20 人が中退（進学者の内 13.7%）、正規・非正規含む就職者の 186 人が離職（就職者の内 32.7%）状況にあった。

（3）心理教育アセスメントを活用した個別支援プログラム：児童養護施設において心理職ならではの視点を活かして学習と進路支援を行い、一定の成果が見られた事例を通して、心理職が学習と進路支援に携わる意義と課題を明らかにした。

対象児：中学3年生の入所児童

心理教育アセスメント：KABC- を実施 方針：検査結果を含む心理アセスメントに基づき、主に児童への学習と進路に関する心理面接と、学を直接指導する生活担当職員へのコンサルテーションを行った。

面接過程：児童の得意不得意の理解を促し、将来の夢や家庭への想いなど学習と進路に纏わる不安を取り扱った。その結果、児童から前向きな発言が聞かれるようになった。

考察：児童の想いを傾聴する姿勢や、共に考えるスタンスといった心理面に配慮した関わりは、学習と進路支援においても活きるといえる。また、心理職ならではの臨床心理学的視点から学習と進路の支援に関わり、他職種と協働することで、児童や職員の心理的なサポートを含めた包括的な支援ができることが示唆された。

（4）学習支援に関するインタビュー調査

協力施設及び対象者：3施設代表者

方法：半構造化面接

結果：共通する学習支援として、学習ボランティア（学生9名・一般7名）と地域の塾の活用が挙げられた。家庭教師による支援は1施設、心理職が学習支援に直接関わっているのは1施設であった。対象児は、幼児から高校生まで計78名、学習ボランティアでは、学生が28名、一般が24名に対応していた。内容は主に宿題などの学習補助であった。中学生以上では塾（各1カ所；計15名）や家庭教師（対象児7名）で、主に成績の向上や進学に向けた準備などを目的とした支援がされていた。心理職（対象児4名）は、発達の特性や情緒的な問題を抱えた子どもへのケアも含めての学習支援を行っていた。課題としては学力の問題や発達の特性を抱えている子どもへの支援、学習意欲の低い子どもへの対応などが課題として挙げられた。特に、小学生と高校生については、予算的な制約から、対応が不十分であることが示された。

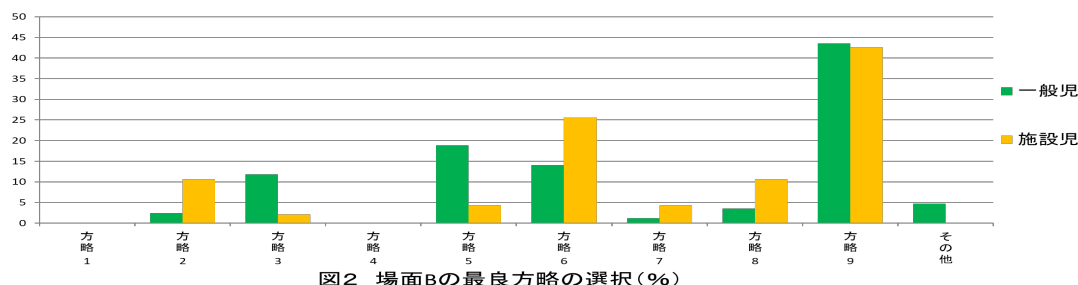
（5）学校生活スキル及び学校における葛藤解決に関する研究

学校生活スキルの調査

施設群(44名)と一般群(85名)の学校生活スキルの比較：二要因分散分析を行った結果、「集団活動スキル」と「健康維持スキル」で交互作用が認められた。単純主効果の検定で、「集団活動スキル」では、女子において施設群は一般群より有意に得点が低く（ $p < .05$ ）、「健康維持スキル」では、男子において施設群は一般群より有意に得点が高かった（ $p < .05$ ）。「自己学習スキル」では群の主効果がみられ、施設群は一般群より有意に得点が低かった（ $p < .05$ ）。施設の子どもたちは自分自身で学習を進めていくスキルが一般群の子どもたちに比べ低いことが示され、学習面の支援の必要性が明らかになったといえる。

半構造化面接で得られた回答：選んだ方略のスコアリングを行い、各群の人数の比較につい

ては²検定を行った。最良の方略について²検定および残差分析によって行った。その結果、資源の不足場面意見の相違場面（図2）においていずれも方略2（一方的主張）では、施設児が一般児より有意に（ $p < .05$ ）多かった。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子・森田美弥子 (2018). 児童養護施設における学習と進路の問題とその支援に関する実態調査. *子どもの虐待とネグレクト*, 20(2), 227-237.
 米澤由実子・坪井裕子・三後美紀・柴田一匡 (2016). 児童福祉施設職員が感じる子どもの性的問題対応における困難性. *自由記述の分析から*. *人間環境大学附属臨床心理相談室紀要*, 10, 65-71.

坪井裕子・柴田一匡・米澤由実子・三後美紀 (2016). 児童養護施設における性的問題に対する施設のケアの体制と取り組みについて. *人間と環境*, 7, 21-28.

米澤由実子・坪井裕子 (2015). 児童福祉施設における性教育の取り組み. *各施設取り組みの報告集より*. *人間環境大学附属臨床心理相談室紀要*, 9, 35-44.

三後美紀・坪井裕子・米澤由実子・柴田一匡 (2015). 児童福祉施設における子どもの性的問題に関する職員の意識. *心理臨床学研究*, 33, 5, 519-524.

〔学会発表〕(計20件)

柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子・森田美弥子 (2017). 児童養護施設における心理アセスメントを活用した学習支援. *日本心理臨床学会*, 第36回大会発表論文集, 235.
 坪井裕子・柴田一匡・米澤由実子・三後美紀 (2017). 児童養護施設における学習支援の実態(1) - 学習支援体制と課題. *日本子ども虐待防止学会*, 第23回学術集会ちば大会抄録集, 259.

柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子・森田美弥子 (2017). 児童養護施設における学習支援の実態(2) - 学習支援者の状況と課題. *日本子ども虐待防止学会*, 第23回学術集会ちば大会抄録集, 259.

米澤由実子・坪井裕子・三後美紀・柴田一匡・窪田由紀 (2017). 児童養護施設における学習支援の実態(3) - 心理職による学習支援と課題. *日本子ども虐待防止学会*, 第23回学術集会ちば大会抄録集, 260.

米澤由実子・坪井裕子・三後美紀・柴田一匡・窪田由紀 (2016). 児童養護施設における包括的心の発達支援プログラムでみられた子どもの反応. *東海心理学会*, 第65回大会発表論文集, 38.

Tsuboi H・Suzuki N・Igarashi T・Matsumoto M・Morita M (2016) The Interpersonal Conflict Resolution Features of Japanese Children Living in Welfare Institutions, *International School Psychology Association, The 38th Annual Conference, (Amsterdam, Nederland) Abstract*, 182.

米澤由実子・坪井裕子・三後美紀・柴田一匡・窪田由紀 (2016). 児童養護施設における子どもの育ちを支える包括的発達支援(1) 心理教育プログラムでみられた子どもの反応. *日本心理臨床学会*, 第35回大会発表論文集, 303

柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子・森田美弥子 (2016). 児童養護施設における子どもの育ちを支える包括的発達支援(2) 学習・進路の実態調査から見える課題. *日本心理臨床学会*, 第35回大会発表論文集, 304

米澤由実子・坪井裕子・三後美紀・柴田一匡・窪田由紀 (2016). 児童養護施設における包括的心の発達支援(1) - 職員からみたプログラムの効果 -. *日本学校心理学会*, 第18回名古屋大会発表抄録集, 92.

柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子・森田美弥子 (2016). 児童養護施設における包括的心の発達支援(2) - 学習・進路の実態調査から見る施設の体制と課題 -. *日本学校心理学会*, 第18回名古屋大会発表抄録集, 88.

柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子・森田美弥子 (2016). 児童養護施設入所児童

の学校在籍状況及び進路に関する調査．日本子ども虐待防止学会，第 22 回学術集会おおさか大会抄録集，257．

米澤由実子・坪井裕子・三後美紀・柴田一匡・窪田由紀（2015）児童養護施設における子どもの育ちを支える心理教育プログラムの効果，日本学校心理学会第 17 回大会，2015.7.18～19

三後美紀・坪井裕子・柴田一匡・米澤由実子（2015）児童養護施設における心理教育プログラムの効果 職員による子どもの行動観察の分析，日本教育心理学会第 56 回総会 2015.8.26～28

坪井裕子・三後美紀・柴田一匡・米澤由実子（2015）児童福祉施設における子どもの育ちを支える心理教育プログラム（1）- プログラムの概要と施設内臨床心理士から見た課題について - ，日本心理臨床学会第 34 回秋季大会 2015.9.18～20

米澤由実子・坪井裕子・三後美紀・柴田一匡・窪田由紀（2015）児童福祉施設における子どもの育ちを支える心理教育プログラム(2) - A 施設における職員からみたプログラムの効果 - ，日本心理臨床学会第 34 回秋季大会 2015.9.18～20

柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子（2015）児童福祉施設における子どもの育ちを支える心理教育プログラム（3）- B 施設におけるプログラム実施後の子どもの意識の変化 - ，日本心理臨床学会第 34 回秋季大会 2015.9.18～20

三後美紀・坪井裕子・柴田一匡・米澤由実子（2015）児童福祉施設における子どもの育ちを支える心理教育プログラム（4）- B 施設におけるプログラム実施前後の職員の意識の変化 - ，日本心理臨床学会第 34 回秋季大会 2015.9.18～20

柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子・森田美弥子（2015）児童養護施設における心理教育プログラムの効果（1） 自由記述の分析 ，日本子どもの虐待防止学会第 21 回学術集会

三後美紀・坪井裕子・柴田一匡・米澤由実子（2015）児童養護施設における心理教育プログラムの効果（2） 子どもの意識と職員の見方の違いに着目して ，日本子どもの虐待防止学会第 21 回学術集会

米澤由実子・坪井裕子・三後美紀・柴田一匡・窪田由紀（2015）. 児童養護施設における子どもの育ちを支える心理教育プログラムの効果．日本学校心理学会，第 17 回大阪大会 発表抄録集，53．

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6．研究組織

(1)研究分担者：なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：三後 美紀

ローマ字氏名：SANGO Miki

研究協力者氏名：窪田 由紀

ローマ字氏名：KUBOTA Yuki

研究協力者氏名：柴田 一匡

ローマ字氏名：SHIBATA Kazumasa

研究協力者氏名：米澤 由実子

ローマ字氏名；YONEZAWA Yumiko